

スウェーデン旅行で思ったこと

スウェーデンへ8人の仲間と行ってきました。9月の下旬の10日間の旅行です。

仕事の責任を離れて振り返ってみる余裕ができたためなのか、ずっと考えてきたことの答えを、この機会に見つけたいと思いました。

新しい社団にとって、これが意味のあることか、そうでないのかわかりませんが、書いてみます。



思い起こすと、生まれて30年間、スウェーデンに住んでの13年間は、深く考えない、ひとり勝手な感性の中にいたように思います。平成の日本に戻ってからは、思いもかけない仕事や人の流れに巻き込まれて、夢から現実へと放り出された20数年間でした。日々忙しく、大切ななものもそうでないものもとりこぼしつつ、混沌として、時にきらっと感動する、雑多な落ち着かない日々でした。記憶が交錯したこの20数年間の私から、少し我に帰ってみたい、と思っていました。

今回のスウェーデン旅行のスケジュールはかなり欲張りなハードなものでしたが、精神的には自由で、わがままにさせていただきました。なつかしいカーリンさんに会えて、ヤーナのシュタイナーセミナーに再び立って、本物の фин羊に出会えて、北のテルベリーの美しい自然に包まれて、…、記憶をひもとく、よみがえりの旅になりました。

感性の世界にいることが許されていた時期は、植物が好き、樹が好き、ペスタロッチ先生が好き、刺繡が好き、駒場の民芸館の空気が好き、高い山が好き、脇田和が好き、スウェーデンの光が好き…、とふわふわしていました。

そういう自分も、多分、どんな人も、無意識の中に在ったものを、たどっていき、つなげてみると、今の現実はやはり必然であった、と思うのではないでしょうか。ピタゴラスイッチのように、これまで色々経験したようで、あちこち寄り道したようで、でも、ゴールはピタっと今の私、というような。見えないレールが引かれていたことに気づく時があります。それをたどっていくと「憧れ」とか「好き」というキーワードが浮かんできます。



そういう私の憧れの芽は、スウェーデンの人々の暮らしから生まれた美しいヘムスロイド、ウォルドルフ人形との出会い、カーリンさん、シュタイナーのウォルドルフ教育、子供たちへの豊かなまなざしから生まれた文化、それに照らし出された、日本の良さ、深さ、そういうものに育てられたように思います。
あらためて、好きとか憧れる心は、人を創り、人が育つ源なのだと確信します。

スウェーデンには1850年代から1950年にかけて、ほとんど時を同じくして、特筆すべき風が起こっています。日本の民芸工芸の運動を起こした柳宗悦は工芸の村、テルベリーを訪れヘムスロイドに深く共感したということです。今回の旅行でも立ち寄ることができたので感慨深いです。柳はまた晩年のウィリアム・モリスにも会っています。スウェーデン各地の暮らしの工芸はヘムスロイド協会として発足し、今に続いています。「児童の世紀」を書いたエレン・ケイ、「ニ尔斯の不思議な旅」のセルマ・ラーゲルレーフたちも子どもたちへの視線を外さない新しい波を起しています。そしてルドルフ・シュタイナーのウォルドルフ教育も同じ頃から始まります。

私たちの魅せられているウォルドルフ人形の思想的な背景となる、美しき風が、その頃、日本で、イギリスで、ドイツで、そして特別に強くスウェーデンに吹いていたのですね。はるかなはかりごとの風でしょうか。意思とか共感の風でしょうか。

私は、この風を、いつも感じていたいと思っています。

私たちにはあまり関係がありませんが、来年2018年はスウェーデンと日本の国交が樹立して150年を迎える節目の年だそうです。それに因んでというわけではありませんが、来年の横浜高島屋では、ぜひ、スウェーデンを意識した企画を立てたいと考えています。スウェーデンへの憧れをオマージュとして形にしてみたいです。

ぱたぽんのみなさん、ぜひ一緒に企画に参加してください。

ひとつ、決まっていること、カーリンさんがあのなつかしいアンナや別の新しいお人形が日本にやってきまーす！

でも、とりあえずは中部キャンペーンですね。がんばりましょう！

LYCKA TILL! =リッカティル！=頑張って！

2017年10月29日 佐々木奈々子



© MAHO

通信 16号-資料 3